

自殺 ■

エタリオウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

屋上へ出ると、どうやら先客がいたらしい。

自殺  
▪

目  
次

## 自殺

「死ぬ勇気があるなら生きれるだろ」「世界にはお前より不幸なやつがいるんだぞ」とか、きつと言われるだろうな。誰がどのくらい不幸なんて関係なく、僕は不幸だというのに。

もしかしたら、ありふれた不幸だと断じられるかもしれない。そんなことで死のうとするなど、誰かが諭すかもしれない。それならそれでいい、僕の心が弱かったということ構わない。

もう決めたのだ。

これが最後に登る階段だと。これが最後に聞く靴音だと。これが最後に開ける扉だと。これが最後に感じる風だと。これが最後に見る景色だと――。

そう、決めたのに――、

貯水タンクとか、得体の知れない何かとか。そういうものが並んだ屋上から見ゆるのは、美しい夕日のはずだった。なんせ、あの太陽が沈むと同時に僕も飛び降りようと、少しロマンチックな最後を飾るつもりだったのだから。

だというのに、屋上の重たい扉の先に、想像していたような真っ赤な夕日は見えなかった。

先客がいるのだ。僕の視界から太陽を隠すように、その男は佇んでいる。

扉を開く重々しい音で、男はこちらに顔を向けた。

いかにも不健康そうな肌色に、目の下に大きな隈が張り付いている。どこかやつれた雰囲気をもとつていて、服装は乱れていた。そして何よりも、死んだ目をしている。

柵の外側に居るからとか関係なしに、僕はその男が死ぬつもりなのだど悟った。男は僕を視界に入れた途端、なぜか顔を綻ばせる。

「貴方ですか？」

「ええ、貴方も？」

まるで、昼から呑みに居酒屋に行ったら知り合いがいたかのような、そんな雰囲気で言葉を交わす。場所だけを除けば、穏やかな時間

ともいっていい。

「それで、貴方はどうして?」

そう僕は尋ねた。

男は茜色の空を見上げてから、観念したように肩を下げる。男の気持を代弁するならば、本当は言っちゃ駄目なんだけど、どうせこれから死ぬなら別にいいか、だろう。

「今朝の朝刊見ました?」

「見てないですね。ニューヨーク・タイムズなら読んだんですけど」

「なんでそんなの読んでるんですか……」

やっぱ世界情勢を知るの大切かなって。

余談であるが、別に僕は英語が得意なわけではない。ニューヨーク・タイムズなんて洒落たもの読んでも、トラックからチンパンジーが逃げ出したことくらいしか分からなかった。

「それで、朝刊がどうしました?」

「ああ、とある会社の横領事件がでかど載っていましたよ」

「……話の流れ的に、貴方の会社ですか」

「そういうことです」

僕は大きく頷いて言う。それは死ななきゃいけない、と。嫌悪感は抱かない。この人にはこの人なりの、そうせざるを得なかった理由があるはずだから。

「そういう貴方はどうして?」

今度は男が尋ねてきた。僕は男のように迷うことはなく、率直に答える。

「恋人が死にました」

僕はついさつき、恋人をなくした。まだ現実味がないって感じるくらいに、本当に、ついさつきの出来事だ。

病室で寝込んでいた彼女は死の間際、此方に瞳を向けて、四回だけ唇を動かした。すでに喉を震わすだけの力はなく、残念ながら声とはなりえなかったが、何かを言いたかったということだけは伝わった。

それは、『ごめんね』とか『Thanks』だったかもしれない。彼女のことだから、意外と『腹ペコ』だったりしてな。

いつだって明るかった、そんな彼女が死んだんだ。恋をしたら世界が色づくなら、それを失えば世界はモノクロと化す。

——愛するものが死んだ時には、自殺しなきゃあなりません。

こんな詩だって、世の中にはあるんだ。期待と不安が入り混じる春、僕の心の中は、限りなく空っぽだった。

「うん、それは死ななきゃいけない」

僕がしたように、男もまた大きく頷いて断じる。太陽は大きく傾いており、もうすぐに夜が来る。沈黙の中、僕らはじっと日暮れを待った。

ちょうど、そんな時。僕らの足が、あとほんのちよつとで屋上から離れるといった時だ。屋上の扉が開く、重々しい音が耳に入った。振り向いてみると、ビジネススーツを身にまとった女性が立っている。

ああ、鏡を見れば、僕もこんな顔をしているのだろうか。

貴方もですか、と僕は顔を綻ばせた。